

海外エレクトィブクラークシップ報告書

ー ヘブライ大学医学部附属ハダサメディカルセンター

【基本情報】

留学先機関名：ヘブライ大学医学部附属ハダサメディカルセンター

Hadassah Medical Center (英語)

הדסה רפואי מרכז (ヘブライ語)

プログラム名：Hadassah Medical exchange (URL: <http://www.jerusalemmedexchange.com/>)

配属先：感染症内科

Department of Microbiology and Infectious Diseases (英語)

実習期間：2018年1月14日(日) - 2018年2月1日(木)

留学先所在地：イスラエル・エルサレム

【初めに】

エレクトィブクラークシップ(以下、EC)は非常に自由度の高い実習であり、実習先さえ確保できれば、文字通り世界中のどこでも実習を行うことができる。私は中東イスラエルのエルサレムにて1ヶ月をECに費やした。

国際交流室のホームページを拝見する限り、直近5年間では中東諸国でECが行われた記録は存在しない。中東は紛争の絶えない危険な地域と思われがちだが、実際のところ特定の地域を除けば治安は安定しており、基本的なインフラも整備されているため、異邦人として苦しい生活を強いられるといったことはない。医療水準については必ずしも高いとは言えないが、イスラエルに限定すると欧米先進諸国と同水準にあると考えてよいだろう。しかし純粋に医療を学ぶためにイスラエルへ行くことは、全く推奨できない。言語の壁、習慣の壁があまりにも高いので、それになじむ労力を費やすよりは、イギリスやアメリカなど英語圏かつ馴染みある文化圏の中で気楽に実習に注力したほうが、圧倒的に有意義だろう。それでもなお中東で私がECをすることを選んだのは、まさにその言語や習慣の壁の存在故にである。

病を治すのは医師を含めた医療者の専売特許であるが、人或いは国家を治すのは別問題である。それは誰にでもできることであると同時に、誰にでもできるわけではない。などといろいろと考えを巡らせた結果、いつの間にか中東でECを行う決心をしていた。再度明言しておくが、どこでも良いから海外で医療を学びたいという人は、迷わず欧米諸国を選んでほしい。しかし中東でECをすることについて何らかの具体的な目的意識がある人、何となく面白そうと感じる人、荒涼とした大地が好きな人、世間の喧騒・やさしさにうんざりしている人はぜひ中東に足を踏み入れてみてほしいと思う。

【イスラエルとエルサレムについて】

イスラエルは1948年に建国された国家で、地中海東岸に面している。面積は2.2万km²と四国ほどの大きさであるが、南北には九州よりも長く、細長い形状をしている。イスラエルはその他の中東諸国とはあらゆる点でかけ離れた国家である。まず宗教について、イスラエルはユダヤ教国であるのに対し、その他の中東諸国はすべてイスラム教国である。また民族についてもほとんどの中東諸国ではアラブ人が大勢を占める中、イスラエルではアシュケナジーと呼ばれる白人系の民族が占めている。端的に言えば、イス

ラエルは中東の中で”浮いて”いるのである。これはイスラエルの建国経緯を考えれば、当然の結果と言えるだろう。

イスラエルはユダヤ人(ユダヤ教を信仰する者及び、ユダヤ人を母に持つ者と定義される)によって1948年に建国された、比較的新しい国家である。そもそもユダヤ教の源流であるיהוה¹信仰を国教とする国家がB.C. 10世紀ごろには現在のイスラエル内、エルサレムに存在しており、ユダヤ人はB.C. 1世紀後半まではその地域を中心に生活していた。しかし周辺国との戦争で敗戦を重ねた結果、ユダヤ人は故郷を追われ、世界中へと拡散していくこととなった。各地で迫害を受けながらもユダヤ人は宗教民族としてのアイデンティティを保ち続けていたのだが、19世紀末に起きたドレフュス事件というユダヤ人迫害事件をきっかけとして、エルサレムを中心としたユダヤ人国家を建国することが考案された。これがシオニズムである。しかしユダヤ人がエルサレムを追われていた2000年の間に、同地域にはアラブ人たちが定着していたので、イスラエルはアラブ人を追い出す形で建国された。これがパレスチナ問題の端緒であり、未だにイスラエルとほとんどの中東諸国は対立関係にある。

エルサレムはその名前がB.C. 20世紀ごろから確認されている、人類最古の都市の1つである。アブラハムの宗教発祥の地であり、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の聖地を有する。現在のエルサレム市内は、東西エルサレムと1km四方の城壁に囲まれた旧市街(元々のエルサレム)の3つに分けられ、聖地はいずれも旧市街内部にある。

イスラエルはエルサレムを首都と主張しているが、国連安保理決議478号によりその主張は無効とされている。そのため各国はその外交使節をエルサレムではなく、テルアビブという別の都市に置いている。

【ハダサメディカルセンターについて】

ハダサメディカルセンター(以下、ハダサ)はイスラエル建国以前、パレスチナ委任統治領時代1918年に設立された。現在はヘブライ大学医学部の附属病院として、エルサレム市内に2つのキャンパスを有する。病床数は1000以上、医師数は900弱と、ほぼ東京大学医学部附属病院(以下、東大病院)とほぼ変わらない規模の総合病院である。ハダサはイスラエルの中でも珍しく、患者・医師の両方にユダヤ人、パレスチナ人が混在している。すなわちユダヤ人医師がパレスチナ人の患者を診ることもあれば、パレスチナ人の医師がユダヤ人患者を診ることもあるのだ。ハダサの理念には”Hadassah Medical Organization is also a bridge to peace. It forges links between patients of all nationalities, races and religion who come to its doors for healing.”という文言が含まれている。病院の理念が平和や患者間の関係について言及しているということは非常に興味深く、先述のパレスチナ問題などの歴史的経緯も含めると、その重みを感じられるのではないだろうか。

院内の公用語はヘブライ語である。しかしほとんどの医療者は英語での会話も可能であるので、必ずしもヘブライ語を学んでいく必要はない。患者はヘブライ語しか話せない者が多いが、実習担当医師が適宜通訳してくれるので問題はない。なおロシア語、アラビア語もよく使われている。

¹ アブラハムの宗教(ユダヤ教・キリスト教・イスラム教)における唯一神の名。みだりに唱えてはならないとされており、表記のように発音記号を伴わない子音4字(神聖4文字とも)で表される。

【渡航前の準備】

①EC についての説明会 (2017 年 4 月 4 日)

教務係による EC 説明会が開催され、各種事務手続きやスケジュールなどの説明がなされた。学部の手続き上、この時点ではまだ焦る必要はない。但し奨学金に申し込む場合には応募要項の提出が必要となるので注意。なおヘブライ大学は東京大学の提携校でないため、申し込める奨学金に制限がある。私はハダサでの実習(EC I 期)と、翌月のヨルダンでの実習(EC II 期)を連結として、大坪先生の大坪修・鉄門フェローシップに申し込んだ。受給者として選抜されると 15 万円の援助がいただけるので、積極的に申し込むと良い。仮申し込みの締め切りは 6 月初旬。

②各種書類の準備 (2017 年 9 月初旬～2017 年 10 月末)

海外 EC を行うためにはいくつかの書類を作成する必要がある。

提出物		提出先	締め切り
1	医学部長からの英文推薦状	ハダサ	実習開始日の 2 か月前
1-1	推薦状の下書き	国際交流室	
1-2	駒場・本郷の成績証明	国際交流室	
1-3	和文履歴書	国際交流室	
2	ワクチン接種証明書	ハダサ	実習開始日の 2 か月前
3	CV(英文履歴書)	ハダサ	実習開始日の 2 か月前
4	パスポート	ハダサ	実習開始日の 2 か月前
5	実習カリキュラムの概要書	教務係	2017 年 10 月 13 日

1.医学部長からの英文推薦状

国際交流室に作成を依頼する。推薦状の下書き、成績証明、和文履歴書を送付して、およそ 1 週間後には厳封された推薦状を受け取ることができる。成績証明は学部の自動発行機から即日発行できるが、推薦状の下書き、和文履歴書については別途作成する必要がある。和文履歴書のフォーマットは自由なので、すでに作成したことのある人はそれを提出すればよい。推薦状の下書きは国際交流室でフォーマットが提供されているので、それを参考に作成する。実習先の施設名や住所などの他に自身のアピールポイント(語学力等)を記載する必要がある。英語は前提条件であるが、ヘブライ語、ロシア語、アラビア語のいずれか 1 つでも扱えるのであれば、重宝されるだろう。なおアピールポ

イントを記載するには客観的な証明が必要になるので、もしあれば合わせて国際交流室へ提出する。

2. ワクチン接種証明書

ハダサ指定のワクチン接種証明書(英文)を保健センタートラベルクリニックで作成してもらう。元書式はワクチンの名称が間違っていたり、日本ではメジャーではない検査を要求してきたりしているが、最終的には保健センターの受診のみで完結させることができる。具体的な記入方法については、私が保健センターで作成してもらった書類を参考にしてもらうと良いだろう。保健センターには過去の学生が海外 EC 用に作成したワクチン接種証明書のコピーがストックされており、医師は適宜それを参照している。トラベルクリニックを受診した際にはまず、医師に留学先がハダサであること、2017年に同施設に行った学生が保健センターでワクチン接種証明書を作成していることの2点を伝え、スムーズに手続きが進むだろう。なおトラベルクリニックの受診は、申し込みプロセスの律速となるので、可能な限り早期の受診を推奨する。ワクチン接種証明書を作成するにあたり、ツベルクリン反応検査を受ける必要があるのだが、この検査だけで最低3週間はかかる。初回受診→ツベルクリン反応1回目→1週間後結果確認→ツベルクリン反応2回目→1週間後結果確認という流れの中で、初回受診時にツベルクリン反応1回目を行い且つ1週間後の結果確認の際に2回目のツベルクリン反応を行っても3週間である。実際にはトラベルクリニックの予約枠の都合上、2ヶ月程度を要してしまう可能性も考えられる。さらにツベルクリン反応で陽性が出てしまった日には IGRA を受けなければならなくなるので、余計に時間がとられてしまう。とにかくワクチン接種証明書は、留学する決心がつき次第最優先で作成に取り組むと良い。

3. CV(英文履歴書)

特に書式に指定があるわけではないので、インターネットを参考にそれらしいものを作る。すでに作成したものがある場合は、それを提出すればよい。なおプログラムの可否にどの程度影響するのかは全く分からない。(そもそもこのプログラムに応募して落ちることがあるのかも分からない。実際に留学してみた感覚からすると、ハダサは海外からの学生を渴望しているようなので、落ちることはまずないのではないだろうか。)

4. パスポート

イスラエル滞在期間が3ヶ月以内の場合に限りビザは不要である。病院実習ということで特別なビザが必要なのではと思うかもしれないが、ハダサが明確に不要である旨宣言しているので、心配しなくてよい。残存有効期間は6ヶ月以上必要。なお、イスラエルはパスポートに関して意外な落とし穴がある。もしもアラブ諸国に一度でも訪れたことがあり、その国の入出国スタンプがパスポートに押されているのであれば、入国審査で大変な目に会うことを覚悟しておいた方がよい。運が悪いと別室送りで尋問され、何時間も空港に足止めされる。さらに運が悪いとそのまま入国拒否される可能性もある。ハダサの受け入れ許可証は必ず提示できるように機内持ち込みしておくべきだが、イスラエルの治安関係者は錦の御旗耐性が尋常ではないので、あまり期待しない方がよい。

5. 実習カリキュラムの概要書

詳しくは教務係からアナウンスがあるので、それを参考に作成する。ハダサのプログラム公式ページにある内容を簡単にまとめる程度で十分である。

③プログラムの申込(2017年10月末)

まず実習費の払い込みを行う。1週間当たり 45 ユーロ(6,000 円くらい)なので、実習する週数分を paypal で購入する。Paypal のリンクはプログラムの公式ホームページの How to apply に記載してある。続いて同ページにあるリンクから申込フォームのあるページへ移動する。説明書き等を読むためのリンクを踏むと、何もなかったページに申し込みフォームが出現するので、説明に従い全て記入する。なおフォーム上では Malpractice Insurance に加入している必要があるかのような印象を受けるが、全くその必要はない。プログラムのホームページにも、明確に不要である旨記載されている。しかしフォームの仕様上加入していることにしないと提出できないので、とりあえずチェックを入れる。なおハダサに到着したときに各種保険の加入証明を求められることはないし、そもそも保険の話が出ることすらないので、安心してほしい。最後に各種書類のアップロードが求められるので、先述の書類をスキャンしたものを提出すれば官僚である。なお推薦状については厳封されているが、開けないとスキャンの使用がないので気にせず開封してよい。Paypal の振り込みが適切に行われていれば、申し込みフォーム提出から 2 週間以内に合否がメールで送られてくる。私の場合は申し込みの翌日には受け入れ許可証が送られてきた。

④航空券の手配(2017 年 10 月末)

受け入れ許可を得られたら、早めに航空券を手配する。基本的にはベングリオン空港と国内空港の往復便を押さえることをお勧めする。第三国を経由する形で入国した場合、別室送りにされる可能性が高まる。また、現地到着が金、土となるフライトはどんなに安くても避けた方がよい。イスラエルやイスラム教国は、日曜日から木曜日が平日で、金曜日と土曜日が休日である。イスラエルの休日は安息日、シャバットと呼ばれており、この日はイスラエル国内のすべてが止まる。たとえ空港であっても店は閉まるし、タクシーすら走らない。公共交通機関などもってのほかである。

⑤荷物の準備(2017 年 10 月～2017 年 12 月)

基本的には普通の海外旅行で必要となるものを持って行けばよい。イスラエルのコンセントは type C がほとんどなので、変換プラグは必須である。電圧は 230V なので、必要であれば変圧器を持って行く。気候は基本的に東京とほぼ同じであり、やや気温が低く降水量が少ない。海外 EC の行われる 1-3 月は、東京の冬よりも寒いのでしっかりと寒さ対策をしておくこと。ダウンやコートがあると安心。現地通貨はシェケル(1 シェケル=30 円くらい)だが、成田空港では両替できない。なので日本で円をドルに両替し、現地でドルとシェケルを交換するとよい。クレジットカードはほとんどの場所で使えるが、現金でしか払えない店舗、タクシーもあるので、必ず少しは現金を持って行く必要がある。

意外にも実習では電話可能なスマホが必須になる。ハダサでは PHS を使わず、代わりに個人のスマホを用いる。そのため SIM フリーのスマホを持って行き、現地で通話可能な SIM カードを買うとよい。ベングリオン空港に SIM ショップは 019 という 1 店しかないのだが、そこで売られている国内・国際通話 1 ヶ月無料の SIM カードがおすすめ。

【渡航】

今思えば、本 EC の最大の難関は渡航であった。私は都合により、日本ーイスラエルの往復便ではなく、日本ーポーランドの往復便を押さえたうえで、ポーランドーイスラエル行きの片道航空券を別途購入した。そこにまさかの落とし穴があったのである。私が買った片道航空券はエル・アル航空というイスラエル国立の航空会社のものだったが、どうもこの航空会社は世界一セキュリティが厳しいこ

とで知られているらしい。当時の私はそんなことは露知らず、ポーランドで 1 泊した翌日、ポーランド、シヨパン空港でチェックインしようとしたのだが、その時何か様子がおかしいことに気が付いた。エル・アル航空のチェックインカウンターの前だけ広く空間が確保されており、演説台のようなものが多数設置されているのだ。さらにライフルで武装した警備員がその空間を囲んでおり、物々しい雰囲気である。とりあえず係員らしき男性に接近したところ、先の演説台のようなものの前へ誘導された。そのときそれが質問用の台であったことが分かった。渡航目的や現地の友人の有無、アラブ国家への渡航歴などを一通り聞かれた。この面接は 1 対 1 で行われていたのだが、どうも係員の男性は私が 1 日だけポーランドに滞在していたことが気になるらしい。続いてイスラエルからの帰りの航空券について聞かれた。私は持っていないと答えた。そう、持っていなかったのである。というのも私は翌月イスラエルの隣国ヨルダンにて国際連合パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)のインターンとして別の EC を行う予定だったのだが、その時はまだイスラエルからヨルダンへの交通手段を決めあぐねていたのだ。これは非常にまずい状況である。なぜなら私の日本ーポーランド航空券は往路・復路の間に 2 ヶ月の間隔があり、ハダサにおける実習期間は 1 ヶ月しかないからだ。係員からすると、残りの 1 ヶ月は何をするのか気になって当然である。段々と係員が増え、気づけば 3 人からその空白の 1 ヶ月について質問攻めにあったのだが、UNRWA でインターンをするなどとは口が裂けても言えない。正直に言えば良いだけではないか、と思われるかもしれないが、先述した通りイスラエルにとってパレスチナ問題は気持ちの良い話題ではない。実際 UNRWA 関係者であるという理由だけでイスラエル入国が拒否されることはままあると、UNRWA 職員の方から聞いていた。何とかごまかそうと試みた結果、係員 2/3 を納得させることはできたのだが、残りの 1 人が頑なに私を疑ってきた。その結果私は別室に送られ、尋問と精密荷物検査を受けることとなった。尋問については先ほどと同じような内容を何度も繰り返し聞かれるだけなのでそれほど苦痛ではなかったが、精密荷物検査は非常に厄介であった。荷物をすべてひっくり返され、隅から隅まで爆発物チェック用の器具でこすられるのを遠めに見ながら、ひたすら待たなければならなかったのである。最終的には無罪放免となったのだが、機内持ち込み荷物を大幅に制限され、本来持ち込めるはずのパソコンをトランクに詰めるよう命令された。その後も結局係員により飛行機の搭乗ゲートまで直接誘導されたため、チェックインから搭乗まで全く自由な時間が得られなかった。およそ 3 時間の道のりであった。

6 時間ほどのフライトの末、無事にイスラエル、ベングリオン空港に到着した。ベングリオン空港の入国審査は厳しいと聞いていたので、また足止めを食らうのではないかと心配していたが、今度は何の問題もなく、入国審査を突破できた。ただ周囲に別室送りにされている人が少なからずいたので、運が良かっただけなのかもしれない。

【実習生活】

ハダサはエルサレム市内南西にあるエン・カレムキャンパスと、北東にあるスコープス山キャンパスの 2 つのキャンパスを持つ。私はメインキャンパスであるエン・カレムの感染症内科において実習を行った。感染症内科の主な業務は各科からのコンサルト対応と外来であり、病棟は有していない。医師は 10 名ほどが在籍しており、臨床業務だけでなくヘブライ大学医学部での講義も行っている。

毎週日曜日ー木曜日の 08:30 から 17:00(早いと 15:00)にかけて実習を行った。以下に曜日ごとの実習内容を記載する。

日曜日(ראשון יום)

10:00 - 12:00 感染症外来

月曜日(שני יום)

08:30 - 10:00 血液腫瘍内科回診

13:30 - 15:00 AIDS ミーティング

15:00 - 17:00 スタッフミーティング

火曜日(שלישי יום)

08:30 - 10:00 インфекションコントロールミーティング

13:30 - 14:30 スタッフミーティング(皮膚科合同)

水曜日(רביעי יום)

08:30 - 12:00 感染症外来

13:00 - 14:00 クリニカルカンファレンス

14:00 - 16:00 感染症外来

木曜日(חמישי יום)

10:00 - 11:00 放射線科ミーティング

13:00 - 14:30 スタッフミーティング

外来を除くイベントについては週により異なったが、概ね上記のスケジュールで実習が進行した。実習期間中は感染症内科の一角に個室を与えられていたので、毎朝出勤するとまずはそこに荷物を置き、先生方に当日の予定を聞いて回った。外来予約は日時ではなく日付で取得されているため、患者が実際いつ来るのかを事前に知ることはできない。少々不便ではあるが、患者が外来に到着すると主治医の携帯電話に連絡が入る仕組みになっているので、事前に各先生に連絡が来たら教えてもらえるよう頼んでおかなければならない。回診については外来以上に不規則であるため、毎日各医師に回診の有無と時間を尋ねる必要があった。なお患者のほとんどは英語を話すことができないため、学生が1人で患者と相対することは基本的にない。

スタッフミーティングでは、各医師が最近受け持った症例の中で治療に難渋しているもの、興味深いものをピックアップし共有する。ディスカッションは毎回非常に白熱し、時には怒号にも聞こえるほどの勢いで議論が展開されていた。学生も発表する機会があるが、事前に発表内容について先生方に相談すると丁寧に指導して下さるので、積極的に挑戦すると良い。

毎週水曜日の昼に開催されるクリニカルカンファレンスは、病院関係者ならば誰でも出席できるセミナーである(いわゆるカンファレンスではない)。毎回全く異なるテーマについて、5-6人ほどの講師が講演する。講演前には会場外のホールにて無料のドリンクやおやつが振舞われるので、それを目的にやってくる人もいるらしい。なお講演はヘブライ語なので、スライドが英語でなかったらお手上げである。

【現地での生活】

安息日

エルサレムでの生活を語るにあたり、安息日ほど重要なものはない。先述の通り、ユダヤ教における1週間は、日曜日に始まり土曜日に終わる。金曜日と土曜日、正確には金曜日の日没から土曜日の日没までは安息日(シャバット; שבת)と呼ばれ、あらゆる労働が禁止されている。労働の範囲をどう

定義するかは個人レベルで差異があるが、安息日にはエルサレム市内(旧市街の一部を除く)の全ての公共交通機関、商店、オフィスが休業する。また普段交通の往来が激しい主要な道路からは、一切の自動車が消える。シャバット中は町がゴーストタウンと化すのである。エルサレムで過ごすに当たり、シャバットは決して甘く考えてはいけない。油断すると丸々2日間断食を強いられたり、観光先から帰れなくなったりといったことが起こりうる。最悪の場合野宿を強いられる可能性すら覚悟しなければならない。具体的な注意点については以下の各項目内で触れる。

交通

イスラエルの公共交通機関は多様性に乏しく、そのほとんど全てをバスが担っている。鉄道路線はベングリオン空港-テルアビブ間などのごく限られた区間にのみ敷かれている。エルサレム市内はバス網が整備されており、市内のどこであろうとバス1(あるいは2)本で行くことができる。それに加えてLRT(Light Rail Transit; 軽量軌道交通)という路面電車のような公共交通機関が、ハダサの2つのキャンパスを完全ではないが繋ぐ形で走っており、それを利用してキャンパスへ行くことも可能である。私が滞在していたのは新市街と呼ばれる地区で、ハダサへはバス1本で30分、LRTとバスを組み合わせると40分程度の時間で出勤が可能だった。

バス、LRTは現金で切符を購入し乗車することも可能だが、ラブカブというICカードを購入すれば、ヘブライ大学の交換留学生として学割の恩恵を受けることができる。実習初日に留学生担当スタッフから学割用の証書がもらえるので、それを持ってCentral Bus Station 3F 最奥にあるラブカブ発行所に行き、顔写真入りラブカブを発行してもらおう。取得後はバス駅やLRT駅にある端末でラブカブにチャージして、SuicaやPasmoのような感覚で使用することができる。なおチャージ用の端末はクレジットカードを受け付けないことが多々あるのだが、どうしてもチャージできない場合はCentral Bus Stationのバスチケット売り場でチャージしてもらうこともできる。私の場合、出勤の往復交通費は1日当たりおよそ15シケル弱(400円くらい)であった。

シャバットでは公共交通機関、そしてタクシーまでもが停止する。金曜日の午前中は平日と同様に運行しているが、昼頃には終バス、終電が終了してしまうので、遠くに行きすぎて帰れなくなることがないように気を付けたい。なお厳密にいうとシャバットであってもアラブ人タクシーについては利用することができる。運転手が非ユダヤ人であること以外は普通のタクシーなのだがシャバット中は割高になるので、無駄な出費を避けるためにも活動予定を綿密に立ててから外出することをお勧めする。

食事

イスラム教の食物規定(ハラール)のように、ユダヤ教にも食物規定(コシェル)が存在する。コシェル自体は「正しい状態」という意味を持つ形容詞であるが、コシェルな食べ物自体をコシェルと呼んだり、コシェルな調理場をコシェルと呼んだりもする。具体的には豚肉、ヒレと鱗のない魚は食べていけなかったり、肉と乳製品を一緒に食べてはいけなかったりと様々あるので、興味のある方はぜひ調べていただければと思う。ちなみにエルサレムのユダヤ人は厳格にコシェルを守っているが、非ユダヤ人に同様の規定を順守するよう迫ってくることはないので、自分の食事をコシェルにしなければならないということはない。しかしエルサレムのレストランや商店(旧市街の一部を除く)はほぼすべてコシェルであり、意識せずともコシェルな食生活になるだろう。

なおイスラエル人の内ユダヤ人はおよそ7割ほどであるが、残り3割の人々の中でもイスラム教

徒など食物規定を別途有している場合がある。こういった事情もあり、お土産として食品を持って行くのは避けた方が良い。

滞在中の食事について、個人的には自炊することをお勧めする。新市街周辺には市場やスーパーマーケットがあり、食材、調味料、調理器具などが容易に手に入るの、現地の生活に触れるという意味でも、積極的に活用すると良いだろう。

住居

個人的な体験に過ぎないが、エルサレムにおいて民泊サービスを利用することは推奨されない。私はエルサレムで2件のトラブルに巻き込まれ、多額の損害を被った。結局ホテルズドットコムやブッキングドットコムなどで宿を手配したほうが、確実でありかつ安く済むことが多い。何度か宿トラブルに巻き込まれながらも最終的にはブッキングドットコムで予約したキッチン付きアパートに落ち着いた。ショートステイ専用の物件を提供するウェブサイトもあるようだが、利用したことがないのでその実情は分からない。ただ値段を見る限りでは決して安くはなく、ブッキングドットコムで十分ではないかと思う。なおシャバットにはチェックインが行えない物件もあるので、予約時に必ず確認すること。さもないと厳格なユダヤ人の場合シャバットには電子機器を一切使わないこともあるので、いざチェックインしようと思ってもチェックインできず、連絡もつかず、野宿を強いられることになるかもしれない。ある程度以上の規模のホテルであればシャバットであってもアラブ人スタッフが常駐しているため、本当に困ったらそのようなホテルを頼るのも良いだろう。

【謝辞】

本実習を行うにあたりお世話になりました国際交流室の名西先生、事務員の皆様、教務係の皆様そして大坪修・鉄門フェローシップにより援助をくださいました大坪修先生に、この場をお借りして感謝申し上げます。誠にありがとうございました。